

▼市議会中山欽哉議長からごあいさつをいただきました



また、今回の総会では発足十年を起点にして、法人化を目指すことが承認されました。財政面、活動面で不安がないわけではありませんが、少しづつ準備を進めていきたいと思っております。



私たちが「障害のある人もない人も共に暮らす」という条例を生きたものにする役割を担いましょう。

障害者団体からも多数の方々が参加されると報告されています。

平成十五年十月一日、三市合併によって結成された「さいたま市障害者連合会」、翌十六年「さいたま市障害者協議会」として再発足した私たちの会は、来年は発足十年を迎えます。加盟団体の中には、会員の高齢化という課題を抱えている会もありますが、壮年期への世代交代が進められているところもあります。

昨年度は「ノーマライゼーション条例」を作るために、たくさんの方が百人委員会や市議会傍聴に参加して、熱い思いを語っていただきました。

今年度は市民全体を対象とした「市民会議」が提案され、

会の法人化を目指して

さいたま市障害者協議会第八回総会

平成二十三年六月二十一日

私とノーマライゼーション条例

条例は、作ったら後は市にお任せで終わりではありません
そこに命を吹き込むという仕事に私たちに託されています
「少しでも前に歩みを進めていくために、私たち一人ひとりがしなければならぬ」とは何かを、考えてみましょう



当事者の声があつてこそ変わる

さいたま市聴覚障害者協会
川津 雅弘

さいたま市誰もが共に暮らすための障害者の権利の擁護等に関する条例が施行されましたが、市職員もきちんと内容が把握できているのか、市民に十分な理解が広まっているのか、まだまだ疑問に思う点があります。学習会や講演会、又、いろいろな場面での周知が必要と想っています。障害当事者として不安を持っている方がたくさんいらっしゃると思います。この条例施行をきっかけにさいたま市がどのように変わっていくのか期待しています。

今回の条例施行により、手話通訳者増員のための手話通訳者養成講習会を開催することができたことは嬉しく思っています。しかし、現在の手話通訳者派遣制度では受付時間外や夜間などの対応はできない状態です。例えば、私たち聴覚障害者が急病で病院へ行かなければならぬ

い時、病院の職員(受付・医師・看護師)などが聴覚障害者に対する正しい知識を持ってコミュニケーションできるのかどうか不安をもっています。先日、羽田空港の駐車場を利用した際、事前精算機には「身体障害者手帳をお持ちの方は呼び出しボタンを押してください」とありました。友人が連絡し指示に従って出口に向かうと無人の精算機のみで、友人が再度呼び出しボタンで職員を呼び、しばらく待つてやっと清算できました。混雑時に職員を待つている時の気持ちはどうでしょうか。ろう者のみの場合はどのように対応するのでしょうか。

情報アクセスや情報提供などの合理的配慮はまだかなり遅れています。

聴覚障害者としては、運転免許獲得や民法11条改正など「ろうあ運動」で成果を得た歴史があります。八月五日、障害者基本法第3条で我が国で初めて手話の言



語性を認める法律が公布されました。行政に任せるのではなく、当事者の声・運動があつてこそ社会が変わっていくのだと思います。

平成二年より改正された身体障害者福祉法第34条に「視聴覚障害者情報提供施設の設定」とありますが、さいたま市にはまだありません。今後の課題として「就労支援センター、通所作業所、デイケア施設、高齢者の交流サロン、災害時の避難拠点など」が求められていますし、市内の障害者の生活安定や労働環境などを整えていくことが必要ではないかと思えます。

違いを受け入れる地域社会へ

さいたま市もくせい家族会
岡田久実子

旧与野市に生まれ育った私は、合併して「生まれ変わったさいたま市」の良さが、今一つ実感できずにおりましたが、今回、政令指定都市さいたま市にノーマライゼーション条例が制定されたことを心から嬉しく感じております。

条例検討の始まり当初から注目し、一〇〇人委員会にも登録をしておりますが、家庭事情などもあり、委員会に参加できたのは一回だけでした。それでも、検討会にご参加の皆さまの熱気を強く感じ、この地で何かが動き出しているという実感を強く持つことができました。

精神の障害は他の障害に比べて見えにくく、理解しにくいことが大きな特徴です。さらに、まれに起きる事件などの報道により、特異性がかりが強調されてしまい、そのことが病气や障害の本当の姿をさらに見えにくくしてきました。そのため、本人とその家族は、悩み苦しみながらも社会との接点を見出せずに、孤立しがちになってしまいます。この条例が施行されたからといって、すぐにこのような現状が変わるわけではありませんが、これを土台に、違いを受け入れる地域社会、病气や障害を持ちながら人として当たり前



に生きられる地域社会へと変化し、進化していかれたら、それはとても素晴らしいことだと思えます。そのためには、条例が「絵に描いた餅」に終わらないよう、ノーマライゼーション条例とは何かを、一般市民にはもちろんのこと、小中学校の義務教育の中で、きちんと子どもたちに伝えていくことが、どうしても必要だと考えます。障害は特定の限られた人の問題ではなく、いつ・誰にでも起こりうることで、障害をもつと身近なこととして、個々の生活の中で振り返る機会となるように願っております。

理解しあう場を 作りたい

さいたま市手をつなぐ育成会
黒澤 篤子

私たちの住む、さいたま市ノーマライゼーション条例づくりを宣言して、市民の意見を聞く100人委員会を開催してから一年半が経ちました。

春の日差しを感じられるころ始まった委員会に、私は障害の子を持つ親の立場で本人・家族の思いを反映出来ればと思いい、先も読めずに参加しました。委員会に寄せられた差別事例は、資料にすると分厚く、読み応えのある物で、様々の意見の中には、この事例が差別と感じるのかと疑問視する意見も少なからずありました。

障害のある人が地域で生きていくために

一年以上をかけた条例づくり「専門委員会」「100人委員会」を経て、次に来た市議会への要請行動。みんなよく頑張ったと思います。それぞれの障害の立場から、言い尽くせなかつたこともあつたけど、本当はこれからが大事なのだと思います。

100人委員会の常連の方たちでない、手ごわい方たちにも障害のことを、みんな一生懸命生きていることを、仲良くしたいことをわかってもらうために、努力しましょう。安心して生きていける地域を作るために。

そこから見えてきたのは、障害者の仲間同士でも理解しあえてない事がたくさんあるという現実、これをひとつにまとめることが出来るだろうかとの疑問です。委員会に参加する毎に、実施するに、時間が足りない。今後、条例を作っても、実生活に生かされる条例になるのかとの疑問が、参加者から湧き出てきます。

今まで、障害者の生の意見を発信できる場所が少なかったので、この委員会には、貴重な意見交換の場に成り、私としては、障害種別の違い・障害の感じ方の違いを学ぶ良い機会になりました。なお、こんなに意見が違うなら、どれだけ違うのか発言を聞く事を楽しみたいとの思いも湧き、参加を続けたのです。

毎回、委員会に参加した市障害社課の方々の陰の仕事ぶりはさすがです。携わる皆さんの力で、今春施行に至った条例は、少々違うとも感じますが、障害者を守る条例が出来ました。今後は、この条例を修正して皆さんの思いをつなげて行くことも可能です。この条例が、隣人同士思い合い助け合える調整役に成る事を期待し、これからも見届けて行きたいです。

三国コカ・コーラグループ 自動販売機総合オペレーター



三国フーズ株式会社

私たちは『飲・食』のサービスを通じ、
すべての人々へ『うるおい』を提供します。

〈本 社〉〒363-8601
埼玉県桶川市大字加納180番地
TEL 0120-568-392



障害者として、家族として、東日本大震災から学ぶ・考える。

「ふるさと」に心
ふるわされて

さいたま市聴覚障害者
中途失聴者協会理事
川原 英夫

三月十一日、私たちは大きな地震を体験しました。それに続いて被災地に押し寄せた想像もできない大きな津波、火災…。テレビの前で凍りついて声も出せなかった時期を過ぎ、被害の大きさが次第に明らかになってくると、障害のある人たちはどうしているだろうか、避難所にもいられないのではないかと、胸を痛めていました。

七月二十一日に浦和コミセン第十五集會室で現地に通って障害者支援を行っている方の報告を聞くことができる。と聞いて、早速出かけました。

講師は鴻沼福祉会の斉藤なを子さん、報告者としてみぬま福祉会の松崎空木さんを迎えました。

松崎さんは三月十一日は、施設で入浴介助をしていたのですが、施設長から被災地支援に行かれる人はと聞かれて志願したそうです。四月二十七日から五月三日、行く先は岩手県でした。出発前日に必要なものを準備しました



が、何気なく風船をいくつか持って行ったのが、コミュニケーションを取るのにも役立つと話されました。

続いての斉藤なを子さんの話は、震災後十日過ぎてから何度も出かけ、自分で撮ってきた写真を大きなスクリーンにたくさん映し、障害のある人や家族の方と顔を合わせ、手を取り合ってお話しを聞くことから始めたと言っていました。

船が瓦礫の真ん中にある写真、松ノ木が一本だけ残った陸前高田市。山の

奥まで何もかも津波が奪っていきました。大槌町は町長を始め町の職員も多くを失い、高齢者、子供の犠牲が多かったそうです。

犠牲者の全容は未だにはっきりしていませんが、阪神淡路大震災の犠牲者から推定して、障害の無い人の二倍はいたよと話されました。

車で助かった聴覚障害者も被災直後から真つ暗な中で情報不足の生活。震災は皆に平等に不便をもたらすが、その後に不平等を生むのだということを感じたと話されました。

河北新報に扱えば、今回の震災の特徴は被災地があまりにも広いこと、被災の要素が複合的に重なっていること、現代的な要素が障害のある人たちに大変な困難をもたらしていることであると言われています。

生活の困難さは、障害のある人に重く、不平等にふくらんでいきます。避難所に行っても障害者の姿は見えない、避難所にいらなくても在宅避難をしていると、配給は何も無かったそうです。障害のある人たちにとっては、それまで受けていた支援が受けられない、支える力がいっぺんになくなったということだと思います。

盛岡の障害者センターのようなところ

を訪問した時、話しかけても表情が固まっているおばあさんがいました。

後ろ姿がすべてのものを拒んでいる感じだったが、最後にみんなで「ふるさと」を歌ったら、その人は大粒の涙を流して歌っていたのが印象的だったそうです。

講演後みんなで歌った「ふるさと」に、私も癒されました。

切実に感じたことは、大切なのは、障害者の日常生活が地域と繋がりが豊かなものであることで、そうでなければ災害は乗り越えられないということばでした。

さいたま市民として 震災から学ぶ

さいたま市手をつなぐ育成会
今井 弘子

六月十五日、「障害のある人の命を災害から守るために」というテーマで、障害者協議会の災害時要援護者マニュアル検討（拡大）委員会が開催されました。三月十一日の東日本大震災の惨状が伝わってくるにつれて、もし関東地方直下型地震が起こったらと、私たちの不安は増すばかりでしたので、この催しは時機を得たものであったと思いました。



大きなスクリーンを使って、災害の起る可能性、さいたま市の防災対策、さいたま市の防災施策などの説明を受けました。震災から三ヶ月という時期だったせいもあって、想定される地震という説明の中で、関東平野北西縁断層地帯、さいたま市直下型地震、東京湾北部地震などは、想定されるといっただけだと言われても、リアリティがありすぎて怖くなりました。

起こるかも知れない災害に備えて、何もない時に考え、対策を立てておくことが大事だということも、お話から窺えることでした。

しかし、被災地で避難所暮らしも

きない障害のある人のことを聞くと、本人のせいではないのに極限の苦しみに追い込まれている、もの言えぬ人や家族のことを考え、たまらない気持ちになりました。

そしてこのことは、総ての人にとっても無関係ではないということです。いつ自分や家族が障害者になるか分からない、厳しい現実社会に住んでいるからです。とはいえ人は、自分自身が厳しい環境に置かれている時は、パニックやストレスで、他人の事を配慮する余裕はないと思います。

最近では、個人情報保護法とかで、色々むづかしいこともあるようです。

しかし特別な状況の場合に、取らねばならない行動もあるのではないのでしょうか。

地域、行政とつながっていく行動が、大切になるのではないのでしょうか。

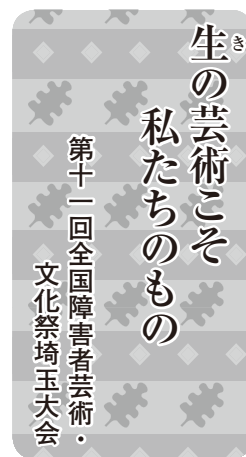
東日本大震災でも、世界中、日本中から援助がありました。

人間は優しいなと感じました。

厳しい状況になった時に必要なことはなんでしょう。身体を維持するには、食べ物は勿論必要ですが、それ以上に必要なものがあると感じました。それは、心と心のつながりではないのでしょうか。

人は同じ状況を共有することで連帯感が生まれるものです。

この連帯感を行政と共に育てて行ければと願っています。



埼玉県は、五月の第一回会議をスタートとして、第十一回全国障害者芸術・文化祭埼玉大会実行委員会を立ち上げました。

委員は障害者関係団体、社会福祉関係者、文化関係者、経済関係者、行政関係者など、たくさんの方が参加され、さいたま市からも何人かの委員が参加しています。

第十一回とあるように、これまで十の県で開催され、今回、埼玉県が手を挙げたのだということを、上田知事があいさつの中で述べられています。

四月以降、オープニング企画として「アール・ブリュット・ジャポネ展」が埼玉県立美術館（北浦和）で開催されました。アール・ブリュットとは、フランス語で訓練や教養などとは無縁で、人間の根源からあふれ出したようなもの、生の芸術という意味だということです。

また、七月十日（日）には、上尾文化センター大ホールで障害者コンサートが開催され、障害のある人も

ない人もいっしょに音楽を聴き、舞台と一つになって歌うひとときを過ごしました。

七つのグループが、それぞれこの日を目指して練習をつみかさねてきたであろうことを思うと、こうした場がもっと身近にあつてよいのではないかと思います。

ゲストとして伊奈学園吹奏楽部の生徒が出演しましたが、舞台いっぱい六十人余りの楽しい曲に、観客は惜しみない拍手を贈りました。

これからの企画としては、さいたま芸術劇場を中心に、ダンスの上演や、ろう者の演出家の演出による演劇などが予定されています。

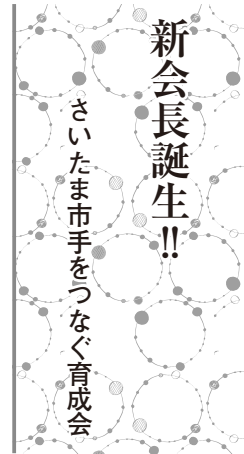
（実行委員 浅輪）



▲伊奈学園吹奏楽部の楽しい演奏

みんなで話そう

団体活動ニュース



新会長誕生!!

さいたま市手をつなぐ育成会

さいたま市手をつなぐ育成会の23年度定期総会において、永年数々の功績を残された浅輪会長が勇退されて、若手のホープで岩槻区出身の宮部幸子新会長が誕生いたしました。

さいたま市育成会は政令指定都市さいたま市が誕生と同時に発足し、行政区と同じ10区支部で活動が始まりました。



▲20ウン年若返った新会長から花束を受けて…

当初、大宮、浦和、与野の3市が合併し、その後、岩槻が合併、大きな4つの市が合併し、大宮、浦和は各4区に分かれて、与野、岩槻はそのまま、この格差がなかなか統一とならず、浅輪前会長は並々ならぬご苦労があったと思われま

す。 やつと少し落ち着いてきた今、心残りは沢山あるのですが、元氣な内に引き継いでほしいとの思いで決断をされたのだと思います。

この大きな志を受け継いで宮部新会長は大海に、今、船出をいたしました。これからの航海は沢山の難所が控えていると想定されますが、若さとガッツで乗り切つて頂けると確信しております。

宮部会長の下、役員一同一致団結し、活動して参りますので、今まで以上にご支援をよろしくお願い致します。

加藤シゲヨ

第42回障害児子育て支援事業
たのしいスポレクのつどい

さいたま市障害児のための連絡会

去る八月七日、日曜日の午後一時半から、さいたま市大宮ふれあい福祉センター



▲清水市長も大玉ころがしに参加!

で誰にでもできるスポーツ感覚のゲームの集いを開催しました。

参加対象は、さいたま市内の特別支援学校、特別支援学級がある小中学校、障害のある幼児達を通う施設など。

当日は障害者ご自身、保護者、兄弟姉妹たち、総勢一五〇人以上の参加がありました。

開会セレモニーでは、さいたま市清水市長の挨拶、教育委員会の方々、そしてこの会の子ども達を応援して下さる議員の皆さん、地元企業の方々の励ましのお言葉をいただきました。

団体競技のバケツにポンは大きな四角

いビニールシートの真ん中にバケツとボールを置いてシートの周りをみんなで作って揺らしてボールをバケツに入れます。ヨイヨイドンでバツバツバツバツとすごい音と風が来ます。皆キヤーカーワーワー楽しそうでした。

帰りにかき水で体を冷やし、お菓子の土産を手渡す時には、ありがたう、楽しかった、と皆元氣に帰っていききました。事故もなく皆の笑顔が見られて良かったと思います。

副代表 米山恵美子

病床日記

（社）埼玉眞筋ジストロフィー協会
さいたま市支部

平成二十三年六月九日、デイサービスに行き、着いた時に急に意識をなくし、救急車でさいたま市立病院に入院、二度目の脳梗塞。新しい梗塞が三ヶ所くらい出来ているという。

七月八日に国立病院機構東埼玉病院のリハビリ科に転院。

毎日九時から十七時に作業療法、言語療法、理学療法と、一日はあつという間に過ぎていく。その中で印象の強かった

日の出来事を歌にしてみた。
八月五日 リハビリ科花火大会
院庭の夜空に

患者の感嘆の音が響く
スタッフよる創意工夫の
花火大会に癒されて

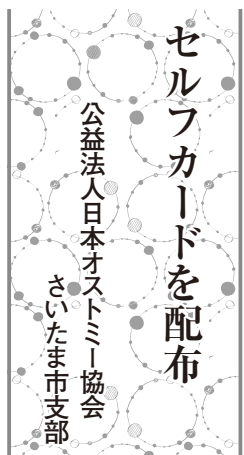
八月十九日 作業療法のリハビリ
ことばを失し二ヶ月

療法士によるリハビリに励み
初めての言葉の発声に

思わず涙が溢れる

七月八日から言語療法が始まり、毎日
のリハビリ。口のあけ方、発声方法など
作業療法では、指先を使ったスクリーン絵
画、あざらしと氷山が一ヶ月で完成。
理学療法では、杖を使って歩行距離も延
び、階段の上り下りなど回復した。
そろそろ退院の見通しも出てきまし
た。

渡辺 郁江



セルフカードを配布

公益社団法人日本オストミー協会
さいたま市支部

日本オストミー協会さいたま市支部で
はこのほど名刺大の「セルフカード」を作
成、支部会員全員に配布しました。

「オストメイト」と呼ばれる会員は、人
工肛門や人工膀胱などを腹部にもつ排
泄機能の障害者なのですが、外見からは



わからない
ために、障
害者のト
イレ利用時
に、不愉快
な思いをす
る人が多い
のです。
このため、
心臓機能障
害者を示し
た「ハート・プラスマーク」カードをヒント
に、オストメイトという内部障害者で有
ることをアピールするカードを作成しよ
う考えました。
当初、裏面を会員証スタイルにする予
定でしたが、東日本大震災で被災したオ
ストメイト達を支援した際、対応に苦慮
したのは自分の使用している器具の品名
がわからない人が多く、連絡や手配に手
間取ったことでした。
「必要な物が必要としている人に迅速

団体紹介 障害者が働き自立できる場作りを 求めて十年 ノーマライズうらわ

ノーマライズうらわは、より多くの障害
者が社会参加できる施設作りを目標に
二〇〇一年九月に浦和区木崎の現在地
に障害者地域デイケア施設として「グ
リーンフィンガーズ」を設立いたしました。

設立当初は未経験の中で暗中模索の
言葉が当てはまるくらい施行錯誤をしな
がらの出発でした。当初六名の障害者の
最低人員から始まりました。一〇年経過
した現在は一七名が通っています。
地域福祉施設の場として精神障害を
持った一七名の方も通っています。

私たちは、障害者が地域社会に健常者
と共に参画しノーマライゼーション社会を
実現できることを目的にして、微力なが
ら、地に足踏み占めて地味な活動ですが

日々努力をしています。
グリーンフィンガーズの活動内容の一端
をご紹介します。

施設では就労活動としてパウンドケー
キの製造販売をメイン事業として展開し
ています。基本的に添加物を最小限にと
どめた素朴なケーキ作りを行っています。
昨年十二月には施設を拡充し、ケーキ製
造専用の作業場もできました。販売は、
浦和区・大宮区・中央区のピア・シヨップ
に出店しています。パウンドケーキ以外に
も「ヌウうどん」（半生うどん）の販売者、
冬には焼き芋を販売したりしています。

販売以外には各種バザーや行事に参加
し地域との親睦をはかっています。また、
月一回二時間の手話学習会を五年間継

に届ける」ことが重要であることも実感
しました。

そこで小さいながらも補装具名などを
書き込めるカードの必要性を痛感、急
遽、別の目的を備えたものとなりました。
平時はもちろん、特に災害時に役に
立つ「セルフカード」となつて欲しいもので
す。
広報担当 鷹野 稔



続けて行っています。パソコンや農園作業も
ボランティアの方の協力で実施しています。
ノーマライズうらわでは、地域の皆様方
のご協力やご支援をいただきながら、グ
リーンフィンガーズに集う障害者が生きる
力を身につけ、働く喜びを見出せるよう
運営に努め、その輪を拡げていければと
願っています。

さいたま市が誕生して十年。ノーマライ
ズうらわ・グリーンフィンガーズも同じ十
年です。十年の間にはいろいろなことがあ
りました。どこの運動体、施設も維持・
運営には苦勞が伴うと思います。いくつも
の課題を乗り越え、継続していくことは、
それなりの意義があると思っています。

今年も十年一区切りの行事を行い、ま
た新たな気持ちで次へとステップアップで
きるよう、がんばって取り組んでいきま
いと思ひます。
ノーマライズうらわ代表 添野ふみ子

今、あらためて感じる 人と人のつながりの 大切さ

さいたま市手をつなぐ育成会
谷地 直美

三月十一日午後二時四十六分東日本大震災が起きました。立っていられないほどの激しい揺れ、これは大変なことになったと思います。

当日自宅には私一人、家族はそれぞれの職場、学校におりました。職場にいる家族は自力で帰宅できる距離でしたので、何とか徒歩でも帰ってこられるだろうと思いましたが、特別支援学校高等部に通学している二年生の娘は、電車を乗り継いで通っておりまして、電車が止まってしまったら帰ってこれないと思いましたが。

学校や娘の携帯に何度電話してもつながらない状況でしたので車で迎えに行きしかないと判断し、渋滞のなか何とか学校に着き娘とともに帰宅できました。その日、たまたま私は自宅にいたので、すぐ車で子どもを迎えに行くことができましたが、もし外にいたら帰宅困難になっていたと思います。大災害が起きたときの対応を考えておかなければいけないとあらためて感じた出来事でした。

東日本大震災では電車が止まり、たくさんの方の帰宅困難者が発生しました。電話もつながらない、メールも数時間たつてからやっと届くような状況でした。親に連絡がとれないまま児童を帰したりした学校に対し苦情が寄せられたという



を知っている協力者が〇〇さんのお子さん大丈夫かしらと気にかけてくれて、助けてくれることがあるかもしれない。親と子で大地震が起きたときどう行動するかと話し合っておくことは必要だと思います。親子で通学路を歩き、危険なところはなにかと確認することも大事だと思います。

できることから少しずつやってみる。まず動いてみると一歩前に進めるのではないかと思います。学校と保護者が連携して児童の安全確保に取り組むことが次の備えにもなりますし、親の不安を少しでも取りのぞくことができると思います。人まかせでなく、親自身考えて行動に移していくことが必要だと思います。

震災から五カ月が過ぎ、三月十一日の本震、その後しばらく続いた余震の恐怖も、少しずつではありますがうすらいでしまっている今日この頃です。でもいつまた地震が起るかわかりません。この大震災を教訓にして、機会あるごとに家族、学校と身の安全の確保について話し合い、地域では防災訓練に参加し地域を知る。

今回の震災では、あらためて、人と人とのつながりや絆の大切さを認識しました。大震災からの復興をお祈りしております。

カットは八月三日の朝日新聞

編集後記

東日本大震災発生後、半年の月日が流れようとしています。あれから、原発による放射能問題・円高・安定しない政治・世界的には異常気象・米国債のランク下げ・ソマリアの飢餓、何を聞いても見ても暗くなる話ばかりで、これからの日本・世界を思い胸が痛くなる日が続きます。

そんな中で私の心が和んだ話題として「なでしこジャパン」の活躍でした。同じ女性として少ないお給料で、お洒落もせず一生懸命、健気に打ち込んでいる姿は、私達に少しの希望をもたらしてくれたのではないのでしょうか？

前向きになれない今日この頃、どうか明るい話題が少しでも増えるように願わずにはられません。

さいたま市障害者協議会
会報あ・うん第15号
発行 さいたま市障害者協議会
会長 浅輪 田鶴子
編集 さいたま市障害者協議会広報委員会
〒330-0801 さいたま市大宮区土手町1-213-1
大宮ふれあい福祉センター4階
TEL 048-653-7271
FAX 048-653-7341
http://www.saitama-planet.com/
e-mail saitamacity-handynet@bz03.plala.or.jp

この会報は、共同募金の配分を受けて発行されています。